

近世広島俳壇における

歳旦帳の定着過程について

岩井まほろ

一、はじめに

歳旦帳とは、年末年始の句をまとめた句集であり、全国各地の俳壇で原則として毎年編纂されようとしたものである。近世芸備地方でもこの歳旦帳が幾種類か見つかっているが、本論文では、その中でも広島県の俳壇によって編まれた歳旦帳について考察してゆきたい。

筆者の管見に入った当地の歳旦帳は次の通りである。

(表一)

表題		刊行年(邦暦)	刊行年(西暦)
1	丁ミのとし三つ物	元文二年	一七三七
2	寛保壬戌歳旦句合	寛保二年	一七四二
3	寛保癸亥歳旦	寛保三年	一七四三

11	10	9	8	7	6	5	4
歳旦	歳旦	歳旦	歳旦	歳旦	丁卯歳旦	延享乙丑歳旦	寛保甲子歳旦
文化二年	天明三年	安永十年	安永九年	安永三年	延享四年	延享二年	寛保四年
一八〇五	一七八三	一七八一	一七八〇	一七七四	一七四七	一七四五	一七四四

本論文では、これらの歳旦帳のうち前半の1〜6までを取上げ各々の歳旦帳の概容と、歳旦帳が整備される過程を内容の面と形式の面から検討してみたい。6までと7以下では、年代的に隔たりが存するためである。

二、歳旦帳の概容

歳旦帳の多くは、年始の風俗をよんだ句「歳旦」と年末の風俗をよんだ句「年尾」の二つの部分から構成されている。1〜6までの歳旦帳をその二つの部分に分けて表にしたものが次である。

(表二)

この表を見てもわかるように、「歳旦」「年尾」の名称も、或いは句の内容も、どれをとっても全く同じものはない。各歳旦帳ごとに変化しているのがわかるであろう。後年の歳旦帳がある一定の形式で編まれていることからして、この時点では歳旦帳の形式が模索され、次第に定着しつつあった過程を示しているとみてよいだろう。

次に、その過程をたどる意味でそれぞれの歳旦帳を検討してゆきたい。まず1の「丁ミのとし三つ物」で

歳旦帳		歳		旦		年		尾		書林
名	称	形式	数	句数	名称	形式	数	句数		
三始	霞、雑煮	三つ物	17	51	年尾	発句	11	11	不明	
若水、花の春	左初鶏	三つ物 合わせ 句合	8	24	歳暮	発句	23	23	銀山町 いよや理助	
右霞	右むめ	句合	4 対	4						
右雑煮		句合	8	16						
鶏旦	半歌仙	1	1	18	歳末	発句	31	31	カナヤマ町 豫章舎利祐	
若胡 ゆつり葉	発句	19	19	6						
題春	発句	6	6	20						
蓬萊と柳と	発句	20	20	13						
うくいす	発句	33	33	33	歳暮	発句	25	25	カナヤマ町 豫章舎利祐	
探題	うち	合わせ物	9	18						
(左右)			21	21						
二十題	発句	59	59	59	歳暮	発句	26	26	銀山町 豫章舎利祐	
探題	発句	34	34	34	歳暮	発句	12	12	銀山町 豫章舎	
探題	発句	34	34	34	柳眠堂当座 左・年籠 右・追儺	句合	6	7		
歳旦	発句	28	28	28						

は、表題に示されるごとく三つ物を中心とした構成になっているのが特徴である。歳旦部分は「三始」としてすべて三つ物であるが、句によまれていた素材に重複がないことから、あらかじめ題を与えられていたものと考えられる。

また、三つ物中心のためか、句数の割に入句者数の少ないのもこの集の特徴である。一七人により六二句をよんでおり、これは一人当たりの句数において他の集と大きく異なる点である。参考までに次の表に示しておく。

表三

内容	歳旦表	
入句者数 (人)	合計句数 (句)	一人当たりの平均句数 (句)
1	17	4.2
2	42	1.9
3	60	1.8
4	56	1.4
5	60	1.4
6	62	1.4

次に2の『寛保壬戌歳旦句合』であるが、これも表題の示すごとく、左右に分かれての句合の形式になっているのが特徴である。最初に八編二四句の三つ物を三組に合わせ、次いで左右それぞれに与えられた素材をよんだ句合わせが続く。

歳旦の部分はすべて句合わせの形式をとっている。句合わせを録しているのは、今回扱った歳旦帳の中では唯一である。また、1の歳旦帳に較べて出句した人数も増え、この集以降可部や草津の俳人も見られるようになる。

3の『寛保癸亥歳旦』は、六つの歳旦帳の中ではただ一つの半歌仙で始まっている。次いで、それに続く歳旦部分では三つ物や句合わせを載せず、素材ごとの発句がよまれている。これは4以降の各歳旦帳にも共通する特徴である。ただし詳細に見ると、発句の句群は三分され、その中の二には「若胡ゆつり葉一对」と「蓬菜と柳と」の題辞が付されている。これら二つの句群は、例えば前者では若胡とゆつり葉の素材が交互によまれており、内容的には句合わせでもある。このことは、句合わせ形式から発句独立形式への過渡的な処置として解される。

4以降の歳旦帳では三つ物および歌仙の形式は見られず、発句中心の構成が定着してきたことがうかがえる。また、句の構成も「探題」を中心とした歳旦と発句のみの年尾のパターンが繰り返されている。

4の『寛保甲子歳旦』の特徴としては、探題の題目に春にちなんだ漢語調のものが多くことが挙げられる。中には漢詩から引用されているものもあり、例えば芦江がよんでいる「春風春水一時來」は、白居易の「府西池」詩の一節「今日

不知誰計會、春風春水一時來」を用いたものであろう。また、探題に続く「合わせ物」では、素材は花の春、恵方棚、萬歳（楽）、屠蘇、大福、福藁、か、み餅、蓬菜、書初の九つであるが、これらの多くは、他の歳旦帳においてしばしば探題として扱われるものである。そして、この後に続く発句中にも「二十題」として、年始の代表的素材をよんだ句が見られる。素材の内容は、次の通りである。初曆、藏開、若胡、齒固、春駒、初日、着衣始、蓬菜、初鷄、宝引、はつ夢、雑煮、門松、縫初、若水、鶯、掛鯛、初明、年玉。（二十題といえ、実際によまれた素材は一九なのであるが、門松と蓬菜をよんだ句が二句ずつあるため、句は二一句見られる。）これらの素材は4以降の探題にとり上げられることが多く、何を句の題材とし易かったか、或いは何が主立った行事であったか、といった面からも、芸備俳壇の中に一つの類型が成立しつつあることを示している。

5の『延享乙丑歳旦』は、歳旦部分の探題において、特別の題は記していないがすぐにわかる程、整然と並べられている。ただし、素材ごとの句数にばらつきがあるのは、各人がいわゆる探題のままに自由によんだせいであろう。素材は一七がおさめられ、これに対する出句数は次の通りである。初日(7)、萬歳(6)、柳(2)、福寿艸(2)、大福(3)、鶯(5)、若水(4)、霞(5)、年男(3)、屠蘇(2)、梅(3)、初鷄(3)、着衣始(3)、蓬菜(2)、書

始(2)、門松(2)、か、み餅(2)。但し句群の途中において、行脚中の俳人路日、楓里、市朝のよんだ句が三句採られているが、素材がそれぞれ異なっているため右の一覧には含めていない。6の『丁卯歳旦』の歳旦部分は、素材ごとの探題三四句と発句二八句によって構成されている。探題では素材ごとに題をつけ、整然と並べられており、内容と句数は次の通りである。若胡(3)、雑煮(2)、日始(3)、福寿艸(3)、四方春(3)、鶯(3)、蓬菜(3)、柳(2)、若水(3)、初鷄(3)、門松(3)、初霞(3)。

一方、4、5、6の歳旦帳の年尾部分は、歳旦部分と比較して渾然と羅列されており、素材ごとの句数にも片寄りが見られる。「ゆく年」や「としの市」をよんだ句が多く、この傾向は7以降の歳旦にもみられるものである。

また、6『丁卯歳旦』では、年尾部分の後半に「柳眠堂当座」として句合わせが行われている。これは他の歳旦帳では見られない。柳眠堂とは、広島島の俳壇の中心的人物の一人であった東雄のことであり、東雄宅で行われた句会での作品である。左方の「年籠」の句は東雄から始まり七名の出句、右方は「追儺」の題で牡支から始まり、六名が出句している。

三、考察

これらの歳旦帳を比較検討することによって、その発達段

階における幾つかの方向性を見出すことができる。

まず第一の点は、歳旦帳における句の構成が整えられ、定着していったことが挙げられる。具体的には、三つ物中心から発句中心の歳旦帳になったことである。先に紹介したように、元文二年の『丁ミのとし三つ物』は三つ物中心に編まれているが、その五年後の『寛保壬戌歳旦句合』では、三つ物はよまれているものの割合はかなり減っている。さらに、その翌年の『寛保癸亥歳旦』においては、三つ物が歌仙にとってかわり、寛保四年の『寛保甲子歳旦』以降は発句のみしか見られない。

また、それに伴ない、歳旦帳の編集形式も確立されてきた。六つの歳旦帳に共通していることは、どの集においても、後半部分に「歳暮」「年尾」等として年末の風俗をよんだ発句が集められていることであるが、前半部分は歳旦帳によってまちまちであった。しかし、年代順に見てゆくと、三つ物から発句のみに句が変化してゆくとともに、歳旦帳の構成も、前半は「探題」として年始の風俗が素材ごとによまれるようになり、その形が定着していった。7以降の歳旦帳も、多くはこの形をとっている。

また、これらのことと関連して、句の内容面に注目すると、発句中心の歳旦帳では「探題」で同じ素材をよんだ句が続くため、単調な印象を受ける。特に、発句であること、さらに

年始の素材が限定されているためか、「○○や」の発句切の形や体言止めを用いた句がやたら目立ち、素材をとらえる視点も、個性的なものはあまり見られない。それに比べて三つ物や歌仙は、一句ごとに視点が転じてゆく面白味があり、ストーリー性に富んでいる。従って、そういった三つ物や歌仙が見られなくなるにつれ、歳旦帳は内容的にも形式化していった、と言えるのではないだろうか。

さらに、出句者の地域別構成に目を向けてみよう。先にも紹介した通り、寛保二年の『寛保壬戌歳旦句合』以降、可部と草津の俳人が常に見られるようになる。(表四参照。表中の数字は出句数である)

この後、安永三年の『歳旦』以降、広島俳壇による歳旦帳は急速な地域的发展を見せるのだが、そのことはここでは置いておこう。ただ、その前段階としてのこの六つの歳旦帳は、広島俳壇の活動が広島だけにとどまらず、可部、草津という二つの周辺地域をも取り込んで行われるようになったことを明らかにしている。

四、まとめ

本論文で扱った六つの歳旦帳は、現存する広島における歳旦帳の中で最も初期のものであり、おそらく、広島俳壇が毎

表四

草津	可部	
一洞 常之 蘇亭 梨平 閑石 柗善 素航 一滴 橙林 梨蝶 桃蹊	其誂 路友 素拍 柳坡	【丁ミのとし三つ物】 元文2 (1737)
	2 2	【寛保壬戌歳旦句合】 寛保2 (1742)
	2 2 2	【寛保癸亥 歳旦】 寛保3 (1743)
	2 2 2	【寛保甲子 歳旦】 寛保4 (1743)
	2 2 2	【延享乙丑 歳旦】 延享2 (1745)
	2 2 2 2	【丁卯歳旦】 延享4 (1747)

年歳旦帳を編纂するようになって間もない頃のものと思われる。それだけに、これらの歳旦帳は、当時の広島における俳諧活動を知る上で貴重な資料であると同時に、歳旦帳そのものが定着してゆく過程を知る上でも大きな手がかりとなり得る。

今回の研究の結果、これらの歳旦帳は、わずか十年の間にある一定の方向性を持って変化し、一つの形に近づいたということがわかった。つまり、先程も述べた通り、三つ物や歌仙から発句中心となり、構成も「探題」と「歳暮」等の形が定着した。地域的にも広がりを見せ、まさに定着、発展したと言えるだろう。しかしながら、形式的に整えられると、句の内容も幾分マンネリ化してきたようにも感じられる。

いずれにせよ、このように歳旦帳を毎年のように刊行し、定着させたことは、広島俳壇の組織力の強化、および俳諧人口の増加を物語っている。広島俳壇における歳旦帳の定着は、広島における俳諧の定着と大きく重なっているとも言えるだろう。

【資料篇】

凡 例

一、本稿では紙面の制約上『丁ミのとし三つ物』（縦18.0cm×横25.1cm）『寛保壬戌歳旦句合』（縦16.6cm×横23.4cm）、『丁卯

歳旦」(縦15.8cm×横22.5cm)の三部を翻刻する。いずれも竹原市、吉井耕一氏の所蔵である。

一、原本の体裁は尊重した。が、漢字については通行の新字体に改めたものがある。仮名は現行字体とし、ハ・ミ・ニなどはそのままとした。

一、原本の丁移りを示すために、一紙の表の末尾に」の印を、裏の末尾に」の印を付した。

一、句頭の番号は私に施した作品番号である。

【I】

丁ミのとし

三つ物

廣しま

連中

東雄

」表紙

三始

1 鶯や初茶筌艸はつ明り

2 恵方かしらの花の釣舟

3 春風も京のふくらは豎横に

4 門忝や轅に眠る下司

5 屠蕪の香を曳四方の風

6 暖に小石かそへる蜷ありて

指水

露光

7 遣羽子やさわらぬかせの一もつれ

8 猿戸ひらける箱の紅梅

9 旅使者の馬か笑へは艸もへて

路竹

10 俵子や難波をかけて辞宜の鱈

11 春の機嫌を見する朝窓

12 青柳は日やりに砂の蕪撫て

壺天

13 稲立て三尺幅や初曆

14 船子も馬士も車座の春

15 鶯の日和くるみに蓋とりて

真門

16 初夢や輕くしうも鐘の聲

17 鳥によせある年の一日

18 春浴衣永野とよく野尻ほめて

杖をゆるさる、年にあいて

仙呂

19 空色や杖の腰のす若胡

20 下馬先行る黒髭の春

21 川を中枕の輪となりて

梅北

22 吉野初瀬是から嬉し福寿艸

23 東坡の竹に床長閑也

- 24 鶯の市の頭をこそくりて
 25 御降や喚る貴人は長者町
 26 羽子澄のほる軒の遠山
 27 初桜鳶ミさこを連にして
 28 棒恠に這ひつく杖や梅の注連
 29 鏡の奥□凍る初空
 30 簾越す酒の軒の春風に
 31 稻積や家そ年経る嵐との
 32 加減を喫す正月の味噌
 33 梅柳是か風門に春の来て
 34 花の春みかくや雲の幡手より
 35 ものき匂ひハ徳君か太刀
 36 出□を京中参りさはかして
 37 車戸や星から御代の初日影
 38 娘の頬に大服の淡
 39 鶯の狂言綺語とさとられて

梅杖

季春

雪中

呂舟

一川

文堂

- 40 肩くまに都見せはや着衣始
 41 一の字長き掃庭の春
 42 白魚の瀬へ雪花のおとつれて
 43 初日脚さすや並木の曲尺
 44 庄屋そ霞む坂の肩衣
 45 春の弓うしろ備へし炉燵ミて
 46 福藁にそよくや花の初匂ひ
 47 雪を撫込む若艸の籠
 48 霞張る網に鯨の海もなし
 49 蕪子の詞おかくて
 50 木、の芽を吹や世界の葳開
 51 凍てへたつく試の筆
 52 深艸は西行こねる春の来て
 53 古哥を吟して
 54 年尾
 55 白川や幾坂越えて年木樵り
 56 直のつかぬ鱒に逃たり髭男

文考

其瀾

風律

東雄

指水

露光

54 待わひた白の目も切れ小晦日

路竹

55 人聲は九折なり年の市

壺天

56 雪に花年を挟むや近江風

梅杖

57 年を取船や片帆のぬけ拍子

雪中

58 月雪や耻しきもの年の暮

梅北

59 兼好に見せはや年の市の塵

仙呂

60 寺町はこゝり豆腐の師走かな

呂舟

61 手届や春を隣の雪見坂

風律

62 羽子賣や浦の苦やも只置す

大尾

【II】

寛保

壬戌

歳旦

句合

廣嶋

霞 雑煮

左

1 葛城や霞の今朝は何うるり

2 数寄屋の窓を猫の初恋
文枝

3 被服てかくす子持も春なれや

4 釣針のむかし零や雑煮箸
仙呂

5 女房ましりの書そめの墨
文五

6 朝風の要に鳥のさへすりて
風律

7 引窓は二番明也初かすみ
陽水

8 柳のかけ繪蝶もまたる、
青雨

9 咲き出す袂土産のいかのほり
壺天

10 明け行や餅のほのく 雑煮鍋
風車

11 黒土ふまぬ部屋の初禮
呂舟

右

左

「表紙

12 京あそふ川の 色も根の付て

芦錐

左

吟素

13 掛初にかすミの棚や茶の匂ひ

九歌

竹も答る其れ関の春

冬羽

14 囉ひ酷問屋男の花まちて

芦江

15 窓を渡す梅に結はん雜煮ノ香

蘭三

羽織のとかに伶人の宿

露橋

16 一ツ橋雲雀の聲と行あひて

由

左

梅北

17 御築地や霞の中を立鳥帽子

亭々

風のすへりに忝のうくひす

丈

18 土を漕く川は棹より凍とけて

丈

貧家に富貴ありと
老母の金言を感ず

梅北

19 雜煮椀老の手つきも手力雄

其友

かさり衣掛にうつる屠蘇の香

水花

20 比良あらし若艸する雲見えて

水花

左 若水

水花

右 花の春

松洞

21 若水に洗ふて見たり物着星

柴梅

22 花の春娘同士のせひくらへ

支嵐

23 ワかミつや大家の娘の良の照

支嵐

28 御立山ふえるほこりや花の春

三枝

29 若水や柳の葉さえるはね雫

可興

30 車井や藍の手先をはなの春

以文

31 わか水や仕付葎光る芥子く、り

寄水

32 御曲輪の奴溜りやはなの春

登之

33 若水に玉は満なり雲の和

其詠

34 元道に童へつる、や花の春

路友

左 初鷄

古語によりて

35 初鷄や唐かけて和哥の花

雪航

36 はつとりや切火はかりは亭主役

五艸

37 初鷄や波もゆるかぬ天の原

尺糸

38 初とりに風の白ミや星の宿

露橋

右 むめ

あけほの、窓をひらきて

草津

蘓亭

39 いつくしま穂先に見るや今朝の森

梨平

40 梅か香や部屋口並ふ初化粧

常之

41 よそに見ぬ山一すちやむめの春

一洞

42 星と梅連る杓や三ツの朝

一洞

左 かすみ

右 雜煮

醫玉堂を造立して
祈壇にのぼる

43 明る夜や霞のはつの葉壺
 44 おつほねも布袋の腹も雑煮哉
 45 かすミ引一の鳥居や二の鳥
 46 竿入らぬ領の塵葉や雑煮の香
 47 山くはかすミ吐けりはつ嗽
 48 鈴の間や雑煮にひく初返事
 49 明立や廣間に霞む對の蝶
 50 は、廣にすハる雑煮や富士湖水
 51 かすむ山見る水仕か新祿
 52 頬髭の手きハもならふ雑煮かな
 53 手庇やかすみ一なで日の移り
 54 面箱に持や雑煮のはこひ膳
 55 雲八座に海の白髭初かすみ
 56 我宿の淡路の空や雑煮湯氣
 57 百船もけさや霞のたれ櫓
 58 雪や花雑煮の前の白重ね
 59 蕨織る聖の世話や衣配り
 60 惜む日や梢雀も市の声
 61 挑灯に戸さらぬ辻や鯽の市
 62 鯽市やはしらに爪の扣書

壺天 風律 亭々 芦錐 青雨 蘭三 文枝 其友 九歌 文五 采丈 水花 仙呂 呂舟 冬羽 昇下 牡支 梅北 宜由 亭々

63 芽桜を文の序や師走便 呂舟
 64 餅つきや障子明れば雪の中 風律
 65 煤掃や虫を頬はる菓子箆筒 青雨
 66 年の夜や舟の寝言を海土の宿 風車
 67 とし守るや晴衣撫る隠居尼 水花
 68 年の夜や雪も粉糺も女中部や 九歌
 69 とし波や鼓か瀧も左利 文枝
 70 比叡おろし和や巻込む師走市 陽水
 71 年強の沙汰やまきる、年わすれ 文五
 72 声届く野の二夕里やとしの市 露橋
 73 節季候や村の娘入の行ちかひ 芦錐
 74 ひとくれた暮る、や年の佐屋廻り 冬羽
 75 餅つきや娘にかさねる多、か膝 芦江
 76 年の市賣子やともに辻放下 吟素
 77 松風や鬢にもて来る年の雪 可部 路友
 78 檜垣茶屋沓の音さへ三十日哉 其詠
 79 寒垢離や富士朝見こす腕まくり 東雄
 80 行年やはしりの溝も清見沔 仙呂
 81 せり細工聞く夜の風や寒かハリ 壺天
 尾

坂本銀山町

いよや理助

丁卯

歳旦

廣陵

表紙

探題

若胡

1 海を陸今や三年の若胡

2 蝶の羽の棚に誘ふや若胡

3 窓むいて木、も吹けり若胡

雜賚

4 妹背山後にもちて雜賚哉

5 薪八楨午は牡丹に雜賚哉

日始

6 日のはしめ馬も眉かけ地のゆるみ

7 日のはしめへたと梅さく地の化粧

8 産食も宝珠の威ある日のはしめ

福寿艸

9 古床もぬくひはへある福寿艸

10 年繩は子どもの幅や福寿艸

11 頭座の会釈ひらきや福寿艸

四方春

12 風呂丁子一里の顔に四方の春

13 料理物飭る国名やよもの春

机によりて

14 五いろの日脚や墨に四方の春

鶯

15 鶯や叶ふ一字の窓の朝

16 鶯やこすき旦那の若はなし

17 うくいすやことに初瀬の糸方筋

蓬萊

18 蓬萊や武士つきあひの札的

19 蓬萊や錚の華咲大廣間

20 蓬萊や注連から居る髪なふり

柳

21 五十日一夜に明けて柳かな

22 初あしたすミ打廻す柳哉

若水

23 君か代や若水汲のちから病

24 若水や目にた、へたる山分限

25 若水やつもる雫の二見濁

初鷄

26 初鷄や書院に並ふ膳のひさ

27 初鷄の聲の雫や里一ツ

クサツ

蕪亭

風律

梅北

一楓

釜翠

宜由

雪濤

陽水

呂舟

九歌

青雨

芙蓉

芦江

吟素

冬里

- | | | | | | |
|----|-----------------|----------|----|-----------------|---------------|
| 28 | 初鷄や忝風あゆむ星の庭 | 菊中 | 47 | 若水や相合波の美濃近江 | 仙瓜 |
| | 門忝 | | 48 | 小塩山神代そ更に日のはしめ | 六合 |
| 29 | 門忝や動ぬ振の砂の伊達 | カベ
路友 | 49 | 鳥もふる門の古実や四方の春 | 白五 |
| 30 | 門松や世を縫もの、針はしめ | 其道 | 50 | 里山も御意いた、くや初霞 | 似文 |
| 31 | 門忝や翁あゆみの屋形道 | 蛙町 | 51 | 垂幣を森の日南や初霞 | 不流 |
| | 初霞 | | 52 | ゆふしてを霞はしめや宮柱 | 化玉 |
| 32 | 初霞あしらひ富士の筆あまり | 不一 | 53 | 幼子の眉のかさしや初かすみ | 市朝 |
| 33 | 峯く、や床も入江の初かすみ | 文枝 | 54 | 蜘蛛の糸なくて羽影や日のはしめ | 寄水 |
| 34 | 箸を打つ山にも神に初霞 | 壺天 | 55 | 万歳や頃愛配る聲開き | 壺山 |
| | 歳旦 | | 56 | 蓬萊や諸手に目行海小富士 | 先遮 |
| 35 | 初鷄や咄しのぬける破風作り | 蘭子 | 57 | 蓬萊や前に漕出すたはこ盆 | ク
サツ
一滴 |
| 36 | 手水水今朝は手に来る霞哉 | 杜子 | 58 | 箒目は馬の引尾や門の忝 | 橙谷 |
| 37 | 御紋着て背もまはゆし日の始 | 盧橘 | 59 | 門松や供のたもともかさりもの | 常之 |
| 38 | 若水や細殿軒のほしの影 | 似水 | 60 | 若水や鳥も素袍の羽子た、き | 糸子 |
| 39 | 絵の赤き飾り扇や四方の春 | 指泉 | 61 | 明行や細戸の隙も初かすみ | いち女 |
| 40 | 大ふくや猫も普代の膝直し | 羽航 | 62 | 手の内も関戸ひしけて筆始 | 洞李 |
| 41 | 門忝や海老をゆひさすふところ子 | 因古 | | 歳暮 | |
| 42 | 蓬萊にわきいる風や若姿 | カベ
柳坡 | 63 | 春待や長屋のれんのたはねのし | 文枝 |
| 43 | 生垣に模様を産や初霞 | 楓里 | 64 | 年の市女中の土産や髻の雪 | 其詠 |
| 44 | 神の木も淡路に向や日のはしめ | 呼紅 | 65 | 今一里押か師走のかつけ持 | 素柏 |
| 45 | 若水や亀の背に乗る顔の艶 | 玩山 | 66 | す、はらひ顔の住居も替りけり | 菊中 |
| 46 | 並忝の間に圓帆や四方の春 | 順和 | 67 | 市の聲空にぬけてや除夜の星 | 柳坡 |

68	行年やさすりのへたる耳たふら	似水
69	鯰賣りやよこれを市の晴子袖	杜子
70	富士形や結禪定岡見顔	盧橘
71	真中ハ鏡屋か座や年籠 ^リ	六合
72	牛の尾のさはきもはやき師走哉	路友
73	髭殿と書札もある鯰の市	指泉
74	行年や苔のむすまで油垢	洞李
柳眠堂当座		
左年籠		
75	噂も来て寐ぬ催促や年籠	東雄
76	注連を張る奴仲間や年籠	吟素
77	酔醒を手形にするや年籠	不一
78	名代や鬼子母に乳母の年籠	呂舟
79	積うそも御燈にあかしつ年籠	芦錐
80	風呂舗を供につれてや年籠	芙蓉
81	大軒庄屋の規模や年こもり	風律
右追儼		
82	相手見て探る碁石やおにやらひ	牡支
83	無理酒に逃所なしおにやらひ	蘭子
84	拂ふ弓射通す壁や鬼やらひ	宇桂
85	綿打も障子の影や鬼やらひ	宜由
86	豆打や数寄屋ハ余所を聞合せ	亭々

87 鬼やらひ柳の波のあられかな 梅北

大尾

板本銀山町

豫草舎

【付記】

本稿において対象とした六部の歳旦帳は、いずれも竹原市・吉井耕一氏の御所蔵である。氏がお与え下さった多大のご便宜に対し、心より御礼申し上げます。